

東京大学大学院人文社会系研究科

平成 24 年 次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣 帰国報告

最終報告提出日：2012 年 9 月 24 日

派遣生の基本情報

氏名：富永京子

所属先：社会学研究室（博士課程 2 年）

派遣形態：個人

研究課題名：社会運動をめぐる「離脱／燃え尽き」の問題——私生活における政治的・非政治的領域の葛藤を中心に

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：イギリス

都市名：コルチェスター、ロンドン、エディンバラ

(2) 派遣期間

2012 年 7 月 5 日-2012 年 9 月 8 日（65 日間）

(1) 当初の計画の概要

申請者が今回の派遣を通じて達成したいと考えている課題は二つある。第一に、データ分析の精緻化である。日本では、Mixed Method や Social Network Analysis の研究における教科書・論文集が多く翻訳されているものの、ソフトウェアの使い方や手法の実践に関しては必ずしも広く流通されて来なかった。そこで、申請者は質的データの分析手法に関するセミナー「45th Essex Summer School in Social Science Data Analysis」(University of Essex)に参加し、質的研究における実践の習得を試みる。

第二に、申請者はロンドンにて、研究データの収集を試みる。社会運動からの離脱やいわば「燃え尽き」は、必ずしも社会運動論・市民社会論において重要視されてこなかったが、私生活や職業生活に対し深刻な影響をおよぼすものとして実践の上で注目されている。そこで申請者は、London に籍をおく「Activist Trauma Support」を対象として調査を行い、社会運動が生活に及ぼす逆機能についての研究を行う。

(2) 実際に達成された成果

申請者は、Essex Summer School(Session 1-3)へと参加し、Social Network Analysis、Mixed Method、Case Study Method の手法を習得した。この成果は、8 月 1 日から 4 日にかけて行われた International Sociological Association 2nd Forum(Buenos Aires,

Argentina)、また 8 月 27 日から 29 日にかけて行われた Power and Difference 3rd Conference(Tampere, Finland)での報告に反映された。二つの会合での議論を通じ、上記三つの手法を日本の事例に対して適用するための具体的課題が明らかになった。また報告者は、Essex での情報をもとに、Network Analysis に関する学会である ASNA 2012 Workshop(Zurich, Switzerland)へと参加した。このように、学会やサマー・スクールにて得た手法に関する知識をもとに、帰国後、社会学・社会情報学・地域研究といった分野の学生らとともにワークショップ(Quantitative Research Workshop)を行っている。とりわけ、Mixed Method と Social Network Analysis は、日本で関心が高まっているものの、ソフトウェアの使用法や検証の手順など、その実践的な研究手法が公にされてきたとはいいいがたい。報告者によるこの度の渡航が、報告者個人の研究のみならず若手研究者にもひろく利用されるものとなればと願ってやまない。

さらに、8 月 19 日から 9 月 8 日まで、主にLondonに滞在しながら在英NGO "Activist Trauma Support", "Smash EDO"、またこうした団体を取りまく人々計 6 名への取材をすすめた。インタビュー人数としては少数であったが、団体の方々によるご厚意から、多くの関連施設やミーティングへの参加が可能になり、現地の市民活動をめぐる状況についてより深い考察をすることが可能になった。日本の状況と比較検討したうえで、それぞれ 11 月に開催される第 85 回日本社会学会(北海道、日本)に、また East Asian Sociologist Network 10th Conference (Tokyo, JAPAN)での報告に一部反映する予定である。

(3) 今後の研究展望

今回の渡航を通じて、方法こそが対象のさまざまな側面を引き出すことを認識した。申請者は今後、博士論文の執筆にあたり Mixed Method を用いる予定である。その量的研究の側面としては Social Network Analysis を、質的研究としては従来通りのインタビューサーベイを行う予定であるが、そのケース選択やパネル調査の過程で、今回のワークショップでの経験が活きるだろう。

また、英国での経験を受け、再度日本のアクティビストたちに社会運動からの「燃え尽き・離脱」経験に関する聞き取りを行っている。こうしたインタビューは、研究調査というよりも自身の私的問題関心に即して行っているものだが、最終的には社会運動実践と研究の双方に貢献できるのではないかと考えている。

将来的に、欧州で出会った研究者たちとの連携を目指したい。多様な領域の研究者との交流によって得られる要素は非常に大きく、申請者自身も欧州での研究生活においてつよい刺激を受けた。研究領域や対象、そして研究する地域にかかわらず、今後も交流を重ね、また交流の機会を公に開いていきたい。